

# 漢代葬式事情

高浜 侑子

中国留学中の陽春四月、指導教授の楊寬老師、劉講師、他の日本人留学生と私の一行四人で西安、洛陽付近の歴代の陵墓を巡った時のことである。足をのばして訪れた河南省鞏県の青空市場の露店で、面白い物を見つけた。それは龍などを刺繍した四角い黄色の絹布で、上部に黒い紐が付いていた。気に入ったので買い求め、ホテルに帰ってボーイに見せ、これは何かと尋ねたところ、渋ってなかなか答ええない。再度尋ねると気を悪くしないかと聞く。気にしないとすると、やっと死者に着せる腰巻きだと教えてくれた。これは喪葬を研究する上で良い資料であると、今も大切に持っている。また死者のために使う紙銭（一種の冥銭）も手に入れた。これは冥国銀行発行の十元札と百元札である。「冥国通用」もしくは「冥中受用」と記され、現世では通用しない紙幣であるが、あの世で困窮しないように、これを墓前で焼いて死者に送るのである。

さて中国では、今を去る二千年前の漢時代においても、死者に供する品物を専門に製作する職人や、市井でそれを販売する商人がいたらしい。また死者のために金銭を副葬する風習もあった。これらのことは考古資料や文献史料から推測することができる。

以下、漢代の葬式事情を表す例を挙げて、その実態を考察してみよう。

『続漢書』礼儀志下及びその注に引く『漢旧儀』によれば、皇帝をはじめとする支配層は、東園匠などが管轄する官営の工房で製作した埋葬用具（例えば皇帝の遺骸を納める梓棺など）や高価な副葬品を用いていた。これに対して、下々の者たちは民間の工人が作った葬式用品を商人から買い求めていたようだ。例えば、河南省洛陽周辺の焼溝・金谷園などで漢代の大墓地が発掘され、墓内から死者と共に納めた様々な副葬品が発見された（『洛陽焼溝漢墓』・『洛陽西郊漢墓発掘報告』『考古学報』一九六三年第二期）。当時、死者は墓の中で生前と同様に生活を営むと考えられていたので、死後の生活に必要な品々を入れたのである。これらの副葬品は一般に明器（死者に供えるために特別に作られた非実用品）が多いが、日常使用した実用品も見られる。その中にセットになった土器類や各種の陶製明器がある。前漢中期の焼溝及び金谷園の墓では、鼎・敦（食物を盛る球形の器）・壺を主体とした礼器のセットを出土する墓と、罐を主体とした日用品のセットを出土する墓が見られる。礼器のセットを副葬できるのは官吏の位に就いた者だけである。これを副葬した墓は焼溝では少ないが、金谷園では比較的多い。さらに倉・竈の明器を伴うこともある。前漢後期になると焼溝では礼器の副葬が増加し、金谷園と大差がなくなる。また両地とも井戸・奩（三足付円形容器）の明器が新たに登場し、銅器や漆器を模した陶製の熏炉・甗・燈・盤も見られる。後漢前期には礼器が急激に減少し、セットを成さないこともある。そして後漢中期以降、礼器は消失し、代わって

奴僕傭や家畜・家禽などの明器が流行する。発掘報告者は、明器の土器の器形や文様が殆ど同様であることから、当時洛陽では明器製造業が盛んであり、同じ規格の品を大量に生産していたのであろうと指摘している。また原田淑人氏は、遼寧省遼陽漢墓出土の陶製明器について、種類が大体決まっており、そのいくつかがセツトを成していることに注目し、恐らく専門の業者がいて、平素この種の明器の既製品を用意し注文者の選択に応じたのではないかと推定している（『世界陶磁全集』八の月報No.1 河出書房刊）。

以上のことから見て、副葬する明器は時期によって流行り廃りがあり、当時の世相や製作者と注文者の好みなどを反映していたと思われる。また明器には幾種類かの既製品が作られており、セツト売りもあればバラ売りもあり、価格も品質によって上・下のランクがあったものと推測される。従って、注文者は商店の店頭などに並んだ見本品を見た上で、死者の身分、家の格式、あるいは経済状態に応じて適当な明器を選んだのではなからうか。

次に文献史料としては、『漢書』に葬式用品を売る商人についての記事が見える。「韓延寿伝」に、「韓延寿……徙潁川。……於是令文学校官諸生皮弁執俎豆、為吏民行喪嫁娶礼。百姓遵用其教、卖偶車馬下里偽物者、棄之市道。」とあり、潁川太守となった韓延寿が、文学の学舎の諸生を使って吏民のために喪祭・嫁娶の礼の手本を示したので、民はその教えに従い、また土偶・木偶・車馬の模型などの地下の偽物（すなわち明器）を売る者はそれを市の路上に棄てた、という。また「游侠伝」の原渉の伝に、「（原）涉即往候、叩門。家哭、涉因入弔、問以喪事。家無所有。涉曰、

『但聚殯除沐浴、待涉』……賓客爭問所當得、涉乃側席而坐、削牘為疏、具記衣被棺木、下至飯含之物、分付諸客。諸客奔走市買、至日晷皆會。」とあり、原渉が知人の家での不幸に際し、食客たちちに命じて死者の衣服、棺から含玉（死者の口中に含ませる玉）に至るまで、市場で買い整えさせたことが記されている。さらに「酷吏伝」の田延年の伝には、富豪による墓の建築資材の買い占めと、それに伴う価格高騰の話も載っている。

また漢より下る北魏時代のことであるが、『洛陽伽藍記』巻四の法雲寺に、「市北慈孝、奉終一里。里内之人以売棺槨為業、賃輻車為事。」とあり、洛陽郊外の二里の住民は棺槨を売り、靈柩車を賃貸しするのを業としていた、という。あるいは漢代にも、このような葬式業を専業とする地区があった可能性がある。

漢墓からは大量の銅銭やそれを模した泥製冥銭も出土している。『陔餘叢考』には紙銭は魏晉時代に始まったとあり、まだ紙が普及していなかった漢代では、紙銭の代わりに当時流通した半兩銭・五銖銭や泥製冥銭が、死者の多福を願って副葬されたのである。

一般に、漢代は厚葬の風が盛んであった。「厚資多藏、器用如生人」（『塩鉄論』散不足）とあるように、人々は身分の上下の別なく、異常なまでに墓に財力を傾けた。こうした風潮が、地下に埋納する品々を製作する職人やそれを販売する商人を支えたのであり、また金銭の副葬を行わしめたのである。厚葬は「事死如生」と言われるように、子が親を思い、生前と同様に死後も亡き父母に仕えたいと願う心情の表れであったが、また反面、葬儀に

〈70頁下段へ続く〉

しているから、これもまた「感情」問題、すなわち、著者が、「直接に答え」る必要ありと指摘する「倫理・道徳問題」である。従って本書は、「倫理学」従事者に課せられた責務の重大さをも、提示している。〔中公新書叢、一九八九年、二四二頁〕

(みなみ たかあき・倫理学)

〈65頁より続く〉

巨額の財を費やし、「三年喪」に服するなどの際立った孝養を世間に示すことは、仕官の道を開いたり、名声を得る(立身揚名)ための重要な手段の一つでもあったのである。いつの時代も、古今東西変わらない世間事情のようである。

(たかはま ゆうこ・考古学)